探訪記

因尾の里をめぐるの記

史談会一月の現地研修は「因尾へ行こう」と話は去る十二月、年末集会の席上できまり、久々宮氏が早速手を打って下さった。

期日は一月十八日の日曜、朝は霜が深くて冷たかったが、日中はポカ〳〵暖かく、まことに恵まれた日であった。

午前八時半、井ノ上でバスを降りた久々宮会長が路の脇に焚火をして待ちうけている。みんな焚火をかこんで暖を取り、身仕度をととのえたり、古藤田氏の車が来、乗かる御井常氏と御子息が加わり、小池氏の車で伊賀氏も一しょになり、総勢二十人ばかり、井ノ上部落の西橋半氏が案内役にまわり、先ず「元国司の址」を尋ねる。

井ノ上部落から五百米ほど後戻った畦道から、まっ直ぐに鍬柳の急な山道を登る。国ヶ峰（かこがたけ）と呼ばれるこの山は全山石塚岩からなる四百米ほどの高さの岩山、野生紫桂の林を抜けたその上、ほげしい喘ぎをかけるほいのぼったところに、大きくポッカリと口をあけた耳指す元国穴があった。

天正の昔、豊臣に攻め込んで来た島津勢の一隊を、東禅寺因尾の土民達がこの洞窟に九てこもり遂に撃つた。これらの事は大友興廃記、豊薩軍記にくわしく書かれ、又に郷会員が去る四十二年十一月三日早朝ここを探検、くわしいその調査報告記を、坂田史談第三十五号に出してくれている。二十人位は結構たてこもれる見事な洞窟、広い入口の前には少しの broad もあり、積上げた枝木や石ころを落せば、攻め寄せた敵兵はいかにみじめである。約十五六米の前面の崖は、木の根にすがり岩かどをふんでよちのぼる外はない要害である。全くうまい所に九てこもったものである。すばらしい場所である。軍記にあるのは多少の潤色もあろうが、それにしても痛快な物語、この元国穴の岩の物語は前快な史跡である。

なにしろ峻烈な岩山で、全員が洞窟にのぼれたかったことは残念であった。道路から二百米余のこの高さに登ることは大変。小雪枝や中宮横の遠足にはもってこいのところ、但し個を準備することを忘れてはならないが、落石による事故がこわい。

山を下って川に下り、水量の著しく減っている川の飛石を渡ってゆく、対岸の宿善寺と訪う。真宗のお寺で住職松藤氏は史談会の賛助会員。このお寺には三十九年の八月にも立ち寄り、西仏を上ってさん振舞わせたことを覚えている。今回も住職御夫妻は歓迎して下さり、お茶、お菓子、それに一升瓶まで持ち出しての〝歓待〟である。

境内のなぎの大木を仰ぐ。よく見るとその枝先の方ばかりに花芽がたくさん密生していて、樹勢がおとろえているようである。薬剤でも使って退治せんと相談するのでは家いか――とそんな話が交わされる。

次はすぐ上手、川の中にそびえ立っている「寄水の岩」である。因長川（奇瑞川の本流）のほとんどまん中に流れをまともに受けてつっ立っている十米位の岩で、切り立った岩、その頂上はかなり広く、数本の松や樹の巨木と、つぼ状の窪水が生え、数基の石の祠が祭られている。

ここも「寄水因尾のこと」と題し、豊薩軍記などにかなり長い物語がのっている。特に筆をかきならし歌を詠みなどして、風雅な遊びとその文意的な叙述は、この因尾の塔が、因尾の将軍が武辺一方でないことを示しているのがうれしい。久々宮会長は用意していたその頃の詩を読んで下さる。ここもすぐれた史跡である。

バスの時刻までまだ少々時間があったので、橋本さんの案内で井ノ上の部落の上の山の墓地をたずねる。樹林の中に見慣れぬまるく美しい石塔が二基と、また普通の墓に交るように数基の五輪の墓などがあった。それらの時代を推定する文字や手がかりはなかったが、いずれもこの井ノ上部落を開拓した古い時代の人々をまつったものであろう。

それから一行は自動車に分乗、堂の南に向った。のだが、前高明神を素通りするわけにいかない。前回はスポンをまくり上げて渡ったが、今度は水が全くない涸れ川である。

社殿の巨大な椎の神木を仰いだり、社殿の後の高い高い石垣のような岩壁、その下にいくつもの穴を開いている怪奇な鐘乳洞を見たり、祭神に関する物語以外にも心を奪われるものが多い。平家の落武者平の光世、光国兄弟が因尾の里で落命し、両社にまつられたことも前記軍書にちゃんと出ている。因尾はこのように軍記伝説にいろ〳〵と語られている、まことに奇特な里である。

そして伝説は再び事実に戻り、両宮の今一つ、堂の開の三霊社明神についた。切畑にも興廃記に出ている。私は鳥居のちかくにある一対の狛犬――それは凝灰岩で出来た高さ五の程ばかりの小さなものだが、姿が古風であるのに心をひかれた。たぶん風化がすすんでいるのがおしまれる。

道一つへだてた因長、今どき珍らしくも麦が植えられている田の真ん中に、まことによくまとまった宝塔が一基建っている。高さが一米五の位もあるか、どっしりした塔身、鎌倉期と思わせる屋根、その上の相輪もよく釣合い、春のような暖かい日ざしの中に、端正にそびえている。かがんで近よって見ると屋根裏には梵が刻み出され、それにはあかい朱が立派にのこって美しい。

これから少しはずれた畑の中に、大きな凝灰型の宝塔が九だいた六地蔵塔と、大きくそびえた一宝一石塔と、そしてその脇に宝塔や五輪の塔や庚申塔が十数基（これは雑然と）並んでいる。

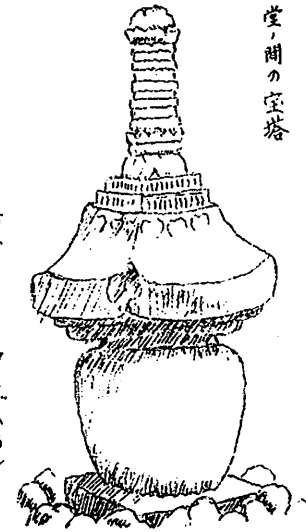
本会の顧問、益田先生が再度に、時間をかけてしらべられる。その徒系の先生の見解も承わりたいが、ともかくも石造文化財の少ない本区村に、こんな立派なものが、貴重がられの姿で残っていることはすばらしいことである。

時計は一時を指している。実のところ今日の目

的の一つは、今朝水一しょに歩いて下さっている水会の賛助会員柳井勇氏宅の話題である。

お宅はすぐ近くであった。

堂ノ間の宝塔



（桐箱がもう少し伸んでいる）

柳井家では本宅から少しは離れている書斎兼アトリエを拝見する。徐心水やもろ〳〵の品が部屋一ぱい、棚一ぱいに置かれてあって、御主人の美術愛好のご生活がしのばれたが、それにもまして素人の私達の目をたのしませてくれたのは、庭一ぱいの盆栽であった。樹十、いや何百もある大小の鉢には、松あり梅あり、銀杏あり杉あり。それぞれが丹念に育てられ、枝をのばし葉をつややかに、又は葉を落して堂々大樹の相を示し、ゑんなの足を釘づけにする。

本宅に招ぜられて、まずきぬかつぎをいただく。たねなしの干柿が出る。お酒がすゝめられ、高野院長氏のご奔走になるいのしゝが出る。ご接待を夫人がじき〳〵なさる。田尾ならではのことであるが、それにしてもご主人、ご一家の皆さんのご厚意が都座一ぱいにたゞよう。ゆっくり昼食をいただく。

食事中も食後も、話がはずむ。高野院長は母方につく曾祖父、平山春樹二十一代成宜藩入門帳の写しを披露、その師五頭淡窓よりいただいた五言詩の軸を見せて下さる。それは蘭の絵に題する賛で

孤生幽谷底　（孤生幽谷の底）

豈顧無人知　（豈顧みんや人の知る無きを）
時有清風至　（時に清風の至る有れば）
芬芳難自持　（芬芳（フンポウ）自ら持し難し）

荅高（淡窓先生の号）

お座敷の衝立に無雑作に立てかけられている、眉目清秀の青年の像（半髪、上半身、油絵）は、去り日の幸運の猛者柳井正氏で、ご令弟に当るという。今も東中五にその姿をのこしている柳井道場の主であった。御堂話題の人で映画の主人公になった人である。

日蔭の頃の田尾、いやそっと前の室町のころの田尾、一体どんな人達が住んでいたのか。押し寄せて来る島津勢をここ堂の周辺に迎え撃った柳井一統、国が嶽の河内にこもってはげしい抵抗をこころみた土民達の血は、そのまゝ流れていたればこそ、藩政のころ百姓一揆を企て、止むなく仮法度をおかしても百姓達が宇目領に逃散する。そんな抵抗の精神、負けん気の魂が、青年求道家の中に流れ、今日の青少年に受け継がれていると見たいがどうであろうか。本匠村でも中野地区にくらべて、皆かゝ他郷に笈を負う学生が多かった。それも平山春樹の後をうけついでと見てよいであろう。「氣流」「野水再宴」の物語をはじめ、三隅江、前高南社の由来、その外軍記ものがゝいろいろな物語のあること、他の町村に見ぬところである。

このように立てこの田尾の地にあった歴史（生活）の中から、堂ノ間の宝塔のような優秀な文化財が、今にその姿を残していることは、決して偶然ではない。

千羽三郎、柳井家を辞去バスで帰路につく。久々宮会員は今日の記念にと悉加普に一本づつ、豊後梅の苗木をくださる。豊後梅は大分県の県花、花が美しくて大きな実を結ぶ。庭先にでもていねいに植えて田尾の思い出として育てようではないか。そして久々宮会員の厚意に報いたいものである。

（羽柴幹事記）